

「ポスト真実」と メディア・リテラシー

長野県新聞活用教育(N I E)推進協議会長
信州大学学術研究院教育学系教授

松本 康



オックスフォード英語辞書 (Oxford Dictionaries) は、2016年の「今年の言葉」として、「ポスト真実 (post-truth)」を選んだ。「客観的事実よりも感情や個人的信念への訴えかけの方が世論形成に大きく影響する状況」(形容詞)と定義される。最初の用例は1992年だが、昨年のイギリスEU離脱 (Brexit) とアメリカ大統領選挙によって、使用頻度が急に増えたのだとか。「ポスト真実時代」などと書いた新聞もあった。

デマ、噂話、怪情報、フェイクニュース。自分にとって都合のよい情報のみを取り入れ、耳の痛い情報を無視する。そうやって世論が形成されてゆくとすれば、きわめて民主的に恐ろしい世界が作られてしまう。「ポスト真実」の申し子をトップに据えてしまったアメリカは、Twitter時代の壮大な実験 (または凋落) を始めたのかもしれない。

人は自分が見たい事実のみを見たがる。人間が直接に経験する生活世界の情報処理ではよく起こりうることである。そこに他者の視点や考え方を加え、自己中心的な見方から脱することで、より客観性を帯びたものの見方が獲得される。だが世界、国家、社会、歴史など、より多様で複雑な世界については直接確かめにくく、間接的な情報に頼らざるをえない。玉石混淆の情報の中から、もっともらしい「客観的事実」を見定める。そのフィルターとして必要なものが、理性であり教養であり良識である。

マスメディアは、(デマゴグに荷担した時代もあるけれども)、歴史的には一定の「客観的事実」を提供するフィルターの役割を果たしてきた。そこには、(時々誤報もあるけれども)、おおむね正確な「客観的事実」があり「政治的に正しい」言説があった。

「ポスト真実」の流れはマスメディアに対する異議申し立てを含んでいる。マスメディアの伝える「客観的事実」と自分の生活実感とのずれ。有識者 (社会的エリート) の語る価値観と自分の価値観とのずれ。FacebookやTwitterのようSNSがパーソナルメディアとして影響力を強める中で、そのずれは顕在化した。

混迷を深める状況のように見えるが、それは情報環境が世界の本来の姿に近づいたということではないだろうか。教育の仕事として、やるべきことは変わっていない。情報の意味を読み取ること。嘘を嘘として見抜くこと。賢くだまされない人間を育てること。何が「客観的事実」で何が「大切な価値観」なのかを見定めるために、メディアと情報を検証し、吟味するすべを持つこと。メディア・リテラシーを育てる必要性は変わっていない。その基本的な道筋は、すべてNIEの中に含まれている。